連載83 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

現代にもナイチンゲール精神は存在し、感動す。

ある日、「院長、至急青森に帰らないといけないので母を頼みます」と、患者さんの長女A子さんから連絡がありました。A子さんの母親（78歳）に、脳腫瘍（しゅよう）末期状態の終末医療・緩和（かんわ）ケアを在宅で行っていました。患者さんには、娘さんと息子さんがA子さんの他にもいましたが、健康上の理由などで十分なお世話ができず、長女であるA子さん一人の肩にのしかかっている状態だったのです。

当院は在宅医として、15kmほど離れた山間部のご自宅まで、約30〜40分かけて毎月のように訪問していました。そしてA子さんは、末期がんの母親の世話をするため、青森から来松していたのです。しかし、突然ご主人の持病（糖尿病、心疾患）が悪化し、至急入院する必要にせまられました。仕事熱心なご主人は、入院を拒否していたため、説得に青森まで帰らなくてはいけない状況になったのです。また、面倒を見てくれるお子さんもA子さんご夫婦にはいなかったのです。私はしばらく、A子さんの行いをつぶさにみることとなりました。

A子さんは、親を大切にし、兄弟にも優しく、またご主人に対しても頼りがいのある妻でした。そんなA子さんの姿は、自分の行いを誇るでなく、行える機会に感謝する「ナイチンゲールの愛」を体現しているようで、私は思わず感動したのでした。

私は、現在、国の政策で「地域包括ケア病棟」の病院があるので、一時期入院することが可能であることを説明しました。安全・安心な地方創生と、人間愛とが相まって、私たちも清々しく感じ、一生懸命できうる限り協力させていただこうと、あらためて誓ったのです。

患者さんの生活療養を考える時、ショートステイも利用しながらという方法もあります。それは、患者さんやご家族、そして私たちの選択肢の幅を広げることとなりました。

現在の松山医療圏は、全国レベルでみても、患者さんの生活療養サービスやノーマライゼーションが充実しています。さらに、行政、医師会、介護事業所（施設）、ボランティアなど、フォーマル、インフォーマルサービスも成熟してきています。

しかし、そのサービスが、患者さんのご家族の良心に寄りかかって、個人への過度な負担になってしまっていては、本末転倒と言わざるを得ません。これは、今後の課題のひとつでもあります。

現代では、ナイチンゲール精神を個人ではなく、組織に期待されるようになった時代なのでしょう。（ノーマライゼーション）

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 21名
（常勤6名、非常勤15名）
内科・外科専門医 18名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設！

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する 臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/